

国際関係を見る常識

変動の激しい今日の国際社会の潮流を正確にとらえるためには、「常識のレンズ」が是非とも必要である。
米ソ首脳会談が決裂したからといって、五〇年代のような冷戦にはならないし、中ソ関係は改善されていくと見るのが、「常識のレンズ」だといえる

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄



なかじま みねお
昭和十一年長野県生まれ 東京外大中国科卒 東大大学院修了(社会学博士、国際関係論・現代中国学専攻、中国研究の第一人者 著書「中ソ対立と現代」「現代中国の政治と戦略」ほか

常識のレンズ

変動の激しい今日の国際社会の潮流を正確にとらえるためには、しばしばセンセーショナルに伝えられる表面的な動きではなく、その歴史的な背景と国際環境の全体像を認識することが不可欠である。いわば、国際関係の深部の潮流を把握することが大切だといえよう。

このようなことを語ると、国際関係の動きを正しくとらえることは大変難しい課題だと思われるかもしれないが、決

してそうではない。私などしばしば政治家や財界人あるいは外務省の高級官僚、さらにはマスコミ界のお歴々と話す機会があるけれど、情報も知識も豊富だと思われるこれらのエリート指導者たちが、しばしば自らの期待や願望によって国際関係を見るために、とんでもない誤った認識に陥っていることに会ったことがある。

それに反して、一見平凡な生活を送っているかに見える市井の人びとが、意外に正しい認識をもっていることが多いのも事実である。それは、これらの人々が

中国との「友好関係」

もともと身近な例として、過去二、三年間の降つてわいたような中国との「友好関係」をみてみよう。

鄧小平氏のいわゆる経済改革や対外開放政策のために、日本の財界は、二、三年前から中国市場に大きな期待をかけていた。そうしたブームのときに、ある財界人はパーティの席でバラ色の中国市場論を大いに語っていた。その頃は日本のテレビなどが大いに売れたこともあって、そのように見たのであろうが、これも常識的に考えれば、何しろ日本人の一人当たりGNP(国民総生産)の約四十分の一しかない中国社会のことである、経済の実力が伴っていないところへもってきて、一時的に煽られた消費性向に乗って日本からテレビを買おうとすれば、たちまち経済生活が悪化してしまうし、人口が多いだけに外貨もすぐに底をついてしまう。中国は昨年後半からピタッと

いわば常識的に物事を考えているからであって、やはり「常識のレンズ」が国際関係を見る場合にもっとも信頼できる装置なのである。

今日の米ソ関係

この点をもっと具体的に述べてみよう。たとえば、今日の米ソ関係である。昨年は十月上旬にレイキャビックで急速米ソ首脳会談が開かれた。一昨年のジュネーブにおけるレーガン・ゴルバチョフ会談のあと、米ソ間はSDI(アメリカの戦略防衛構想)問題や相互の「スパイ合戦」などによって冷却化していただけに、レイキャビック会談への期待は大きく、米ソ関係は急転直下、大いに改善されるのではないか、といった見方が会談直前になってあちこちで散見された。ところが、SDI問題をめぐって最終会談で物別れとなるや、今度は、米ソ間が再び冷戦にでもなるかのような悲観論が一挙に出てきた。現に、レイキャビック

会談をめぐる新聞論調も、朝刊までは楽観論だったのに、夕刊では一転して悲観論に変わっていた。これなどは「常識のレンズ」が曇ってしまった好例だといえよう。

常識的に考えれば、今日、米ソ間にはSDIをめぐる根本的な対立があるのだから、SDI論議の結末を見ずに楽観論に走るのは危険であるが、しかし、米ソが首脳会談で決裂したからといって、たちどころに五〇年代のような冷戦状態に戻るわけにはゆかないことも常識的に考えれば、十分に理解できる。なぜなら、今日の米ソ両大国は、いずれも国内の経済がうまくいっていないし、軍拡競争のコストに悩んでいて、お互いに共通の問題を抱えているからである。したがって、たかだか二日間の首脳会談で、米ソ関係の対立が解消するはずはないのと同様に、米ソが決定的な物別れになることもできないのであって、ここに五〇年代の冷戦と今日の「新しい冷戦」との大きな違いがあるのである。

輸入をストップしたために、中国市場にバラ色の期待を抱いていた日本の大企業は、すっかり困ってしまったのである。これなども、常識的に中国の今日の姿を見ればよいのに、期待過剰のために「常識のレンズ」が曇ってしまった好例だといえよう。

最近の中ソ関係

そこで、私の専門分野でもう一つ重要な問題を考えてみよう。

それは、日本にとっても無視し得ない最近の中ソ関係改善の動きである。中国の首脳は、日本やアメリカなど西側の指導者に対しては、中ソ改善はあり得ないとこれまでしばしばいつづけて来た。しかし、現実には中ソ関係の改善が始まってきたために、今度は、中ソ間には「三大障害（中ソ国境およびモンゴルにおけるソ連軍の駐留、ベトナムのカンボジア侵攻へのソ連の支持、アフガニスタンにおけるソ連軍の駐留）」があるから、中ソ

和解はあり得ないと言いはじめた。そのために西側諸国の指導者は、中国に経済・技術援助もしくは軍事援助をつづければ、中国はソ連との関係を改善するはずはないという「チャイナ・カード」政策をとってきたのである。

しかし、常識的に考えれば、今日の中国は、かつてあれほど信奉していた「毛沢東思想」を否定し、人民公社の解体に見られるように、社会主義建設における毛沢東モデルを否定しているのだから、そうした全般的な非毛沢東化の潮流の中で、当然、毛沢東の世界戦略、すなわちソ連を戦略上の敵と見なして徹底的に決しようとした反ソ戦略を否定するのであつて、そうなれば中ソ対立の要因がなくなるのだから、中ソ関係は改善される^{と見るのが常識だろう}。しかし、この場合も中ソ関係は改善されてほしくないという期待が西側に強いために、つい「常識のレンズ」が曇ってしまう。

中国外交の視点

そこでこの問題をもう少しつつこんで考えてみよう。中国の世界戦略なり外交政策を考える際に、私たちが見失ってはならない視点は、中国という国は基本的に外部世界の影響を受けることが最も少ない国であるということである。中国の世界戦略は、「イデオロギー」「ナショナルイズム」「チャイニーズ・ワールド・オーダー（中国的世界秩序観）」という世界戦略決定の三要素によって自ら決定されることを忘れてはならない。

中国外交に対するこのような視点は、先述の「チャイナ・カード」政策の視点とは根本的に対立するものである。「チャイナ・カード」政策の立場からすれば、近代化を求める中国はアメリカを始めとする西側の資本や技術を導入するためにも、西側との関係を緊密にすることが中国の国益なのであつて、経済的に豊かでないソ連や社会主義の方向に再び向くこ

とはないであろう、従つて西側が中国に手を差し伸べ、中国との関係を強化すれば、中ソ和解などあり得ない、ということになる。アメリカの対中国政策の基本的な考え方はいまでもそうであり、わが国政府・外務省もそうしたアメリカの政策の影響を受けている。それはキッシンジャー戦略以来の「チャイナ・カード」政策ともいえるだろうし、あるいはアメリカの伝統的な中ソ離間政策だともいえるよう。

しかし、これを受け止める側の中国は、西側との協力によって自己の利益を拡大することについては積極的であつても、西側の意向によつて自らの戦略を修正することは絶対になく国である。たとえば、レイキャビックの米ソ首脳会談で問題になったSDI戦略に中国は反対している。現在の中国の基本的な立場は、アメリカの援助はほしいが、レーガン戦略はいらないというものである。

しかも、現在の中国の経済開放政策は、その行き過ぎのためにあちこちで矛盾が

出てきていて、必ずしもうまくいっていない。日中貿易にしても、日中間の商業基盤が遠いすぎて相互補完性に乏しいので、貿易規模が拡大すればするほど中国側の赤字が増えるだけであり、日本からの輸入増大により中国の外貨は一挙に^海涸してしまった。つまり西側との経済関係を強化したいと思つても、それをダイナミックに発展させる方法をもっていないわけで、その分だけ社会主義諸国やソ連との相互依存関係は、今後深まってい^くであろう。そうしたなかでSDI問題のみならず軍縮問題やニカラガ紛争を始めとする第三世界政策についても、今日の中国はソ連とかなり一致した姿勢を見せはじめている。

中ソ関係改善のステップ

こうしたなかで中ソ関係改善の決定的なステップとなつたのが、昨年七月二十八日にウラジオストクで行われたゴルバチョフ演説であつたが、現在の中ソ

国境貿易や相互の兵力削減問題、あるいはモスクワ・北京を最短距離で結ぶ中ソ間の新しい鉄道建設にしても、ワシントンや東京からは見えなくとも、モスクワからはよく見えるといった形の関係改善はすでに着々と進展しており、この点を私たちは注目しなければならぬ。

鄧小平氏にしろ胡耀邦氏にしろ、西側諸国の指導者が中国に来ると、中ソ間にはい^わゆる「三大障害」が存在している^{ので}、これ以上関係はよくならないから安心して^ください、と語るのだが、しかし、「三大障害」は西側への鄧小平氏のプレゼントであることと同時に、西側指導者の恐れを感じている中国の指導者が、自らの戦略的な手の内を明らかに見せるほど単純ではないということも承知しておかなければならない。しかも現在の鄧小平体制は、依然として国内に根強い反対勢力を抱えている。つい先ごろ開催された中国共産党第十二期六期中央委員会総会において「精神文明に関する決議」が採択された。日本のマスコミの



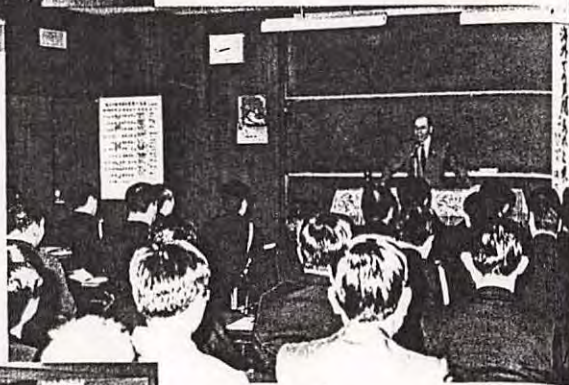
署課隊 写真ニュース

▲チームワークとリーダーシップ

講師 前慶応大学ラグビー部監督

上田昭夫氏

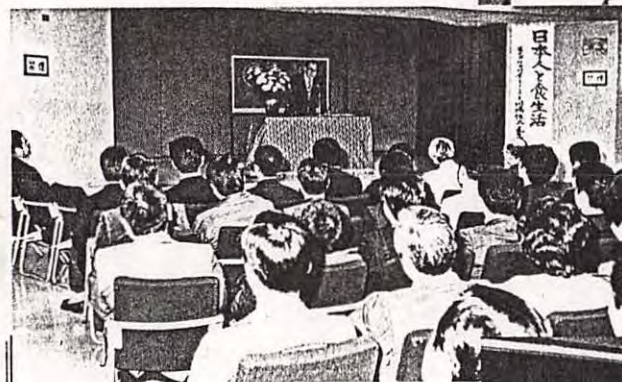
(11・20) 〈富坂署〉



▲海外での見聞あれこれ

講師 講談社最高顧問 須藤博氏

(11・27) 〈大塚署〉



▲日本人と食生活

講師 (株)中村屋東京工場長

川嶋恒二氏

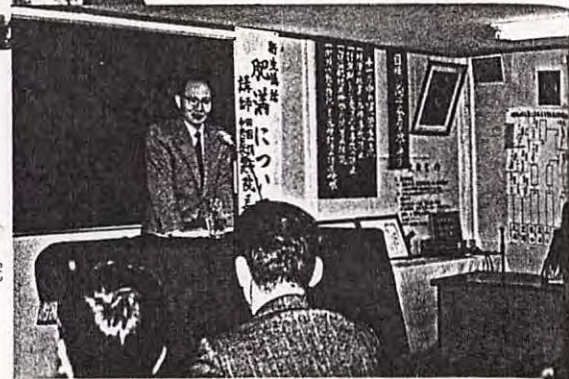
(11・25) 〈杉並署〉

▶肥満について

講師 田園調布中央総合病院

院長 米山弥一郎氏

(11・21) 〈東調布署〉



多くは、この決議は鄧小平型の経済改革、開放体制をさらに前進させるためのもの、と論評していたが、しかし冷静に決議の全文を読んでもみると、鄧小平型の経済改革、開放体制に反対し、あくまでマルクス・レーニン主義を堅持しなければならぬとする勢力がいに根強いかが示されている。

鄧小平ワンマン体制下でさえもこのような亀裂が見えるということは、ポスト鄧小平の中国を考えた場合に、当然かなりの不安を感じざるを得ない。国内の改革派に対する保守派・原則派からのこうしたプレッシャーがあればあるほど、中国はイデオロギー的立場に固執せざるを得なくなり、それだけ中ソ関係が改善されていくということも当然考えられるのである。中国がいかに物分かりがよくなったからといって、依然として中国共産党一党独裁下にあるまじきもない社会主義国家であるという点を決して忘れるわけにはゆかない。これも中国を見る場合の「常識のレンズ」だといえよう。

◆頭の体操問題◆

(解答は147ページ)

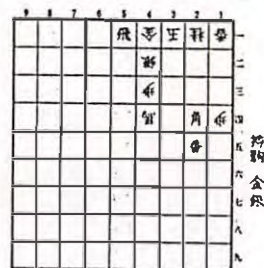
<詰将棋>

ヒント

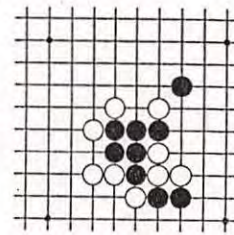
馬の守備を急所からはずす。

(10分で2級)

出題 七段 佐藤義則



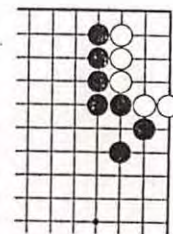
<詰連珠>



出題 八段 手島 照男
【問】黒先で、四三勝ちには？
ヒント 初手に四ノビをすると、白にノラれます。

(10分で3級)

<詰碁>



出題 五段 大岡 信夫
【問】黒先で、結果は？
ヒント 隅でよく見る形。無条件では難しい。

(10分で3級)



巻頭のことば 新しい年の決意

副総監

椿原正博

23

年頭訓示

警視総監

鎌倉 節

24

新年のあいさつ

東京都公安委員会委員

黒川利雄

28

警察庁長官

山田英雄

30

世界を舞う蝶

デザイナー

森 英恵

34

警視総監

鎌倉 節

「マダムハナエ・モリとのファッションナブル・トーク」

二人の子の母として、実業家として活躍する森英恵さんを迎え、
話題は世界の治安からファッションまでひろがつていく

この道ひとすじ

編集部

131

伝統を守って江戸風

橋本禎造

これからのハイテク社会

早稲田大学教授

長谷川幸男

77

「未来のロボットを中心に」

国際関係を見る常識

東京外国語大学教授

中嶋嶺雄

86

国際社会の潮流を正確にとらえるためには、「常識のレンズ」が必要

あの日、あの時⑩

大森署

岩崎交通課長

82

富坂署

濱崎刑防課長

文教の里、歴史の香る町

万世橋署長

小松宗夫

48

「つしごめ」今昔

牛込署長

若泉則行

50

魚の心

東村山署長

杉山 優

52

各界著名人・警察官友の会からの年賀状

インタビュー 今年の抱負 年男・年女に聞く

昭和六十一年警視庁十大ニュース

99

誌上書初展

カラーグラフィア

伊豆大島噴火災害警備（感想と感謝事例）

55

時代小説

ある侍の生涯

村

上元三

弥栄子のマナー教室⑩

梅月弥栄子

178

昭和六十一年警視庁けん銃射撃競技大会

教養課

159

第三十七回警視庁職員駅伝競走大会

教養課

162

フォト警視庁

おいしい料理

170

署・課・隊写真ニュース

フォトコンテスト

172

グラフィア

わが管内・東京水上署

167